



Title	2024 年度（春夏学期） 日本語1 実践報告
Author(s)	六城, 雅章
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 40-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度（春夏学期） 日本語 1 実践報告

六城 雅章

1. はじめに

本稿は、2024 年度（春夏学期）の「日本語 1」の実践報告である。この授業の受講者は 12 名であり、出身地別にみると、中国 6 名・韓国 3 名・台湾 1 名・ミャンマー 1 名・トルコ 1 名である。

2. 授業の概要

2.1 授業の目的・学習目標・成績評価

この授業の目的は、「レポートや論文を作成するために、日本語の文章作法を修得する」ことである。

また、この授業の学習目標は、次の 2 つである。

- （1）日本語の文章作法に則った文章を書くことができる。
- （2）学術的なレポートを論文の体裁で論理立てて書くことができる。

そして、この授業の成績は、学習目標の（1）を小テスト（35%）と問題演習（15%）とによって評価し、（2）を期末レポート（50%）によって評価した。なお、期末レポートの内容は、日本語の動詞の分類について論じよというものであった。

2.2 教科書・参考図書など

教科書は指定せず、自作のプリントを配付した。

参考図書については、『増補版 大人のための国語ゼミ』を指定した。この授業全体の構成（3 節で述べる）は、本書の内容を参考にしたところがある。

その他、『日本語パラグラフ・ライティング入門：読み手を迷わせないための書く技術』などの書籍を紹介したり、論文のコピーを配付したりした。

3. 各回の授業内容

各回の授業内容は、表 1 のとおりである。

表 1 各回の授業内容

回	授業内容
1	・日程・内容・成績評価の説明 ・受講者自己紹介
2	・小テスト／解説 ・「見た目を整える」方法の概説

	・問題演習／解説
3	・小テスト／解説 ・「場面・相手に合わせる」方法の概説（1） ・問題演習／解説
4	・小テスト／解説 ・「場面・相手に合わせる」方法の概説（2） ・問題演習／解説
5	・小テスト／解説 ・「抽象化する・具体化する」方法の概説 ・問題演習／解説
6	・小テスト／解説 ・「列挙する」方法の概説（1） ・問題演習／解説
7	・小テスト／解説 ・「列挙する」方法の概説（2） ・問題演習／解説
8	・小テスト／解説 ・「関係を明らかにする」方法の概説 ・問題演習／解説
9	・小テスト／解説 ・「事実と意見を区別する」方法の概説 ・問題演習／解説
10	・小テスト／解説 ・「反論する」方法の概説 ・問題演習／解説
11	・小テスト／解説 ・「根拠を示す」方法の概説 ・問題演習／解説
12	・小テスト／解説 ・「引用する／出典を示す」方法の概説 ・問題演習／解説
13	・小テスト／解説 ・「パラグラフ・ライティングで書く」方法の概説 ・問題演習／解説
14	・小テスト／解説 ・「レポート・論文を作成する」方法の概説 ・問題演習／解説
15	・小テスト／解説 ・授業全体の総括 ・受講者間でのレポートの添削

3.1 第1回の授業内容

第1回の授業では、オリエンテーションおよび自己紹介を行なった。また、授業全体の概説として、レポートや論文は、単に「自分の伝えたいことを書く」のではなく「読み手に読んでもらえるように、読み手に伝わるように、読み手に納得してもらえるように書く」べきであることを説明した。

3.2 第2～14回の授業内容

第2～14回の授業は、次のような構成で行なった。

- ・【小テスト／解説】(約20分)

授業の冒頭10分間で小テストを実施し、直後にその解説を行なった。

- ・【概説】【問題演習／解説】(約70分)

日本語の文章作法について概説した(各回の内容は表1を参照)のち、授業の最後に、授業内容に沿った問題を受講者に解かせた。また、問題演習については、受講者全員が解答を終えたことを確認したうえで、その解説を行なった。

授業内で【小テスト／解説】【問題演習／解説】を実施したのは、授業内容の積極的な復習を受講者に促すためである。なお、【小テスト／解説】【概説】【問題演習／解説】について、受講者から質問があった場合には、可能なかぎりその場で回答し、その場での回答が困難なものは次回の授業時に回答した。

3.3 第15回の授業内容

第15回の授業は、それまでの集大成となるものであり、その中心は「受講者間でのレポートの添削」(以下、「添削」とする)である。これは、各受講者が自分なりにレポートを一旦完成させたうえで、それを教室に持参し、受講者間でレポートを交換して、互いのレポートの添削を行なう、というものである。なお、この「添削」を実施するにあたっては、授業内で次のような周知活動を行なった。

- ・第1回の授業で、第15回の授業時に「添削」を実施する旨を受講者に伝える。
- ・適宜「添削」の存在に触れる。
- ・第14回の授業で、第15回の授業時にレポートを持参するよう受講者に伝える。

文章作法の授業に「添削」を取り入れることには、少なくとも次の4つの利点があると思われる。

- (1)「読み手に読んでもらえるように、読み手に伝わるように、読み手に納得してもらえるように書く」ことが自然に実践される。なぜならば、「自分なりに一旦完成させたレポート」は、他の受講者に熟読されることを意識して書かれるからである。
- (2) 授業内容の総復習が自然に実践される。なぜならば、他者のレポートを添削するためには、自身がそれまでの授業内容を理解していなければならないからである。
- (3) 他者の文章を読むことで、自分の中にはない発想や表現を学ぶことができる。
- (4) 他者からの指摘によって、自分では気付かなかった問題点に気付くことができる。

そして、「添削」の成果を利用して必要な修正を施したものを、最終的な期末レポートとして提出させた。

なお、第15回の授業の構成は、冒頭で第2～14回と同様の【小テスト／解説】を実施したのちに授業全体の総括を行ない、残った時間のすべてを「添削」に費やす、という形をとった。

4. 今後の課題

以上、2024年度(春夏学期)の「日本語1」について述べた。最後に、15回の授業を終えて明らかになった課題について述べておきたい。

今後の課題として挙げられるのは、期末レポートの内容の見直しである。先述のとおり、この授業の期末レポートの内容は、日本語の動詞の分類について論じよというものであった。これは先行研究の調査を要するものであり、そのような内容を設定したのは、引用の方法や参考文献の記載法などを確実に身につけさせるためであった。だが、「添削」の際、相手のレポートで言及されている先行研究の記述を理解するのに時間がかかり、思うように作業が進んでいない組があった。今後は、受講者に必要以上の負担をかけることがないよう、レポートの内容の見直しを行ないたい。

【参考文献】

- 野矢茂樹(2018)『増補版 大人のための国語ゼミ』筑摩書房
- 松浦年男・田村早苗(2022)『日本語パラグラフ・ライティング入門：読み手を迷わせないための書く技術』研究社